松花堂（しょうくわだう）〔瀧本坊隣地泉之坊にあり、昭乗翁退院の自坊なり。松花堂は茶室の号なり。数寄屋四畳半、水屋壱畳半、勝手二畳、三竈物（みつくどもの）置棚あり、古体の唐戸両開き、天井は藤にて編、屋根茅葺、額八分〕

■　■　■　　比丘昭乗筆　　■　■　■　　額六角　同筆

〔石燈炉庭中にあり、銘曰、

慶安二年

松花堂尊前永代夜燈

九月十八日　　正　良　敬　白

数寄屋待合等風流にして、庭中より宇治川、朝日山（あさひやま）、小倉池（こくらのいけ）、伏見沢田（ふしみのさはだ）、黄檗（わうはく）、木幡里（こはたのさと）、城山（しろやま）、鮮かに見えて無双の妙景なり〕

萩坊（はぎのばう）〔泉坊（いづみのぼう）に隣る、これにも昭乗翁註して自画多し、書院の画は狩野永徳（えいとく）の筆なり〕

なけや鹿なかずば皮をはぎの坊　　宗　祇

覆　醤　集　　悼二南山松花堂一

此老従来与レ俗殊（ナリ）。　自（ラミ）工二草隷一得（タリ）二規摸一（ヲ）。

■浮夢覚（テリ）帰二空界一（ニ）。　声価争（ヒ）伝（フ）水墨（ノ）図。

八幡の瀧本坊身まかりしに

挙白集　かたみかなおつとはみれど音無の瀧もとゞろに袖はながれて　長嘯

〔其外樓櫚坊も昭乗翁の棲給ひし所なり。書院の花鳥の画は永徳の筆なり、松花堂の書画多し。又山下金剛院の客殿の画も永徳の筆にして、惣金極彩色、王昌齢が西宮秋怨の詩のこゝろなり。淀屋巨菴の旧屋は山下の町にて、今は富丸氏こゝに住す〕